

# 歌手・藤あや子さんが闘う子宮体がん

## 50代が発症ピーク、ホルモンと遺伝子変異が原因

今年に入り、演歌歌手の藤あや子さんや俳優の西丸優子さんが、子宮体がんで手術や抗がん剤治療を受けたと公表しています。子宮体がんの症状やリスクとともに、最新の治療方法などを紹介します。

やや肥満気味で57歳のAさんは、もともと月経不順で不妊治療も受けたことがあります。出産の経験はなく、52歳で閉経を迎えました。半年前より時々、おりものに血液が混じるようになり、心配で近くの婦人科を受診しました。

超音波検査と子宮内膜細胞診を受け、内膜が部分的に厚く、細胞診でも異常がみられるといわれました。総合病院の婦人科で子宮内膜の組織検査とMRI検査を受け、子宮体がんIB期と診断され、子宮と卵巣・卵管の摘出手術を受けました。

子宮がんには大きく分けて2種類あります。1つはヒトパピローマウイルス感染で発生する子宮頸(けい)がんで、もう1つが子宮体がんです。子宮頸がんは子宮の入り口にできるがんで、子宮体がんはその奥の子宮内腔の内膜と呼ばれるところの細胞ががん化したものです。

この2つのがんは、がん細胞のかたちも原因も異なります。

日本では、子宮体がんに毎年1万7千人ほどが罹患(りかん)しています。50代が発症のピークです。近年、食生活の西洋化や生涯の月経回数の増加などで、子宮体がんの罹患者も死亡者も増えており、注意が必要です。幸い子宮に局限していれば、手術や術後の抗がん剤治療などで9割以上が治ります。

### ■「おかしいな」と思ったら婦人科へ

発見の契機は、Aさんのように、なんらかの出血(不正性器出血、閉経後出血、月経異常など)がほとんどです。子宮体がんの検診は、国が勧めるがん検診には入っていませんので、「おかしいな」と思ったら婦人科を受診しましょう。

子宮体がんのリスクは、女性ホルモン（エストロゲン）が高い状態と遺伝子変異です。

子宮内膜は卵巣から分泌されるエストロゲンの刺激で増殖します。この影響を長く受けると子宮内膜が厚くなり、子宮内膜増殖症になります。閉経後になっても5ミリ以上と内膜が厚い場合は、婦人科で精査した方がよいでしょう。

子宮内膜増殖症の状態に、遺伝子変異が加わると、細胞の形が変わり、前がん状態となります。さらに進むと子宮体がんが発生します。前がん病変や内膜に限局した非常に早期のがんでは、再発リスクはあるものの、妊孕（にんよう）性（妊娠する能力）を温存した治療も可能です。

月経不順や不妊、肥満などは子宮体がんのリスクです。糖尿病もリスクの一つで、放置すると子宮体がんのリスクが2~3倍高くなります。高エストロゲン状態が50歳前後の女性の子宮体がんの9割の発症に関わっています。このタイプのがんの予後はおおむね良好です。

がんは多かれ少なかれ遺伝子変異で発生する病気です。遺伝子を解析した結果から、子宮体がんは4つの遺伝子発現タイプに分けられます。

そのうちの2つのタイプ（そのほとんどでエストロゲン刺激が関与）では、さまざまな遺伝子変異が見つかります。この中で、とくに多くの遺伝子変異が蓄積しているがんに対しては、転移や再発時に免疫チェックポイント阻害薬という免疫療法が良く効くものがあります。

子宮体がんでⅢ期やⅣ期の進行がんで発見されても、治療をあきらめてはいけません。